

# ライマン雑記(2)

副見 恭子<sup>1)</sup>

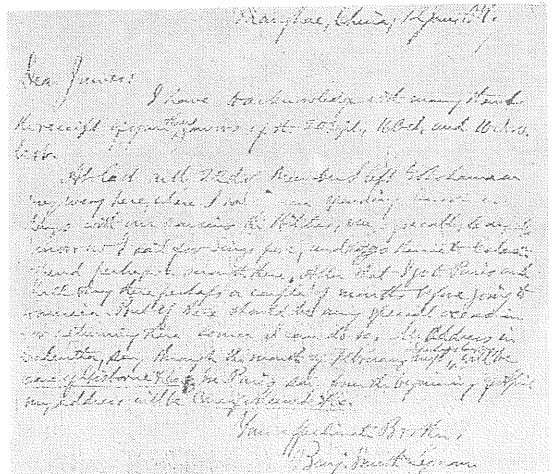
## 2. 離日

1873年(明治6年)1月17日, 横浜の土を踏んだのはライマンが38歳の時であった。壮年期で数多くの経験を通して, 地質測量・調査の力量は円熟しており, 自信満々であったに違いない。当時のライマンを語るのに見逃してならないのは, 彼がマサチューセッツ州西部の名門の出であり, 純粋なヤンキー即ちニューイングランド人であったことである。ライマンの先祖は, 1654年(承応3年)マサチューセッツ州の西部にあるノースハンプトンに最初の開拓者としてやって来て定着し, 漸次栄え, 19世紀の初めには多くの知識人を出し, ライマン家は人々には畏敬の念でみられ, 日本でも知られているアメリカ19世紀の文学・思想の指導者としてソーロ・メルビル・ホイットマン等に影響を与えたラルフ・ウォルドー・エマソンは, ライマン家をしばしば訪れた友人の一人であった。彼注1)は「ジョーゼフ・ライマン夫妻(ベンジャミン・スミス・ライマンの祖父祖母, 但し祖母アン・ロビンズ・ライマンは父サミュエルの義母)は時々朝食に, 一度に20名の著名人を招いたが, 主人役の二人の威厳と知性をしのぐ客は一人もいなかった。又, 誰もいなかったであろう」と回想している。因に付け加えると, 夫妻の末娘キャサリンは, すでに中国で財を成しているウォーレンデラノと1843年にノースハンプトンで結婚し, その娘セラは, フランクリン・デラノ・ルーズベルトの母である。

ベンジャミン・ライマンの人格を形成したもう一つは, ヤンキー気質である。このヤンキー気質を無視しては, 波乱に富んだ彼の日本滞在8年間を充分理解することは出来ないであろう。第30代アメリカ合衆国大統領カルビン・クーリッジは, ヤンキー大統領として名高い。寡黙であり堅忍であったが, 執着せず節約を重んじた。ライマンの生き写しと言ってよい。又ヤンキー・キャラクターは, ピューリタニズムの影響か, 正義のためには勇気を持って猛進し, なかなか妥協しないが, 一方現実主義である。現代に於いても, ニューイングランドの人

々の中に, 大統領選挙や, 人種差別・公害・核実験等の反対運動を通しヤンキー気質を見出し, 頼もしく思う。

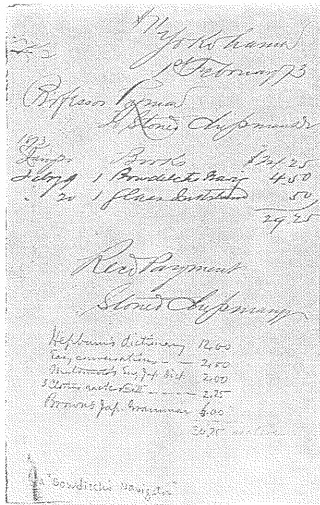
開拓史(明治6年-9年)から内務省, 短期間の後内務省から工部省(明治9年-12年), 契約解除後も自宅平河町のオフィスで地質の仕事に専念し, ライマンが離日したのは1880年(明治13年)12月22日であった。上海から出した兄ジェームスへの1881年1月12日付の手紙(第1図)によると「12月22日に横浜を出帆, 上海でいこと10日程過ぎ翌日シンガポールへ立つ。カルカッタを経て4月にパリ着。多分2ヶ月パリで過ごしてから帰国する」と告げ, 日本別離の感情一片すらうかがわれぬが, 離日に際し, 峻烈を極めた北海道での踏査, 開拓使仮学校女学生, 才色兼備な広瀬 常への片思い, 辛苦を共にした十数名の弟子との心のつながり, 黒田清隆及び開拓使との不和・対立, 日本全国長期間の調査の旅, ライマンの離日を決定したナウマンとその一派との確執等々, 8年間の思い出が次から次へと彼の頭を横切ったに違いない, と推察しても誰が否定できよう。



第1図 兄ジェームスへの手紙。この図では不明瞭であるが実物では数箇所以外は読み取れる。

1) マサチューセッツ大学顧問: 8 Eaton Court, Amherst, MA 01002, U.S.A.

キーワード: お雇い外国人, 日本地質学会



第2図 領収書。

比較的長かったライマンの滞在生活を支えたのは彼の日本文化への興味、地質測量・調査への情熱と弟子とのきづなであった。残っている領収書(第2図)によると、江戸に到着するとすぐへボン辞書(12ドル)、簡易会話辞書(2ドル)、松本英和辞典(2ドル)、ブラウン日本文法(4ドル)の4冊を注文している。大福帳に購入した品名と値段を付けさせ、右側にライマンが鉛筆で英語名を書き込んでいて、沓銭100、三葉菜 Mitsuba、五拾銭5000、餅菓子 Jap. cake、七銭 700、麦粉一斤 1lb. Flour、六銭貳厘五毛 625、茶 Jap. tea、沓円貳拾六銭 1,2600、ロース牛肉七斤 7lb. Roast beef……と明治初期値段の風俗史が展開され、ここでもライマンが日本語を覚えようとする熱意がうかがわれる。

約二千冊のライマン日本文庫は、江戸時代のベストセラー「東海道中膝栗毛」「南総里見八犬伝」「春色梅暦」を初め古くは「湖月抄」「徒然草」又「當世書生気質」までである。ライマンが読んだかどうか知るよしもないが、本を入手した日付と自分の名を書き「来曼」の判を押している上、日本を立つ2ヶ月前ライマン文庫目録「日本出版書籍目録」を作らせている。本の種類は言語・文学・科学・美術・歴史・地理等々幅広く、しかも内容の程度高く、明治初期のインテリ家庭の蔵書と変わらないと思う。

「工部省お雇の来曼氏は、日本文も自由に書けちっとも日本人と変わらなかったが、先生にただ一つ困ることは『きのふはわちきが、おまはんの方へ参る筈でありました』などと言うことだ。」<sup>註2)</sup> この事は、明治12年の朝野新聞にかかれたものらしいが、ライマンが日本語を読み書き話したのは確かであり、それと共に何かしら町の人々、大工さんや植木屋さんや八百屋さんに親しま

1990年9月号

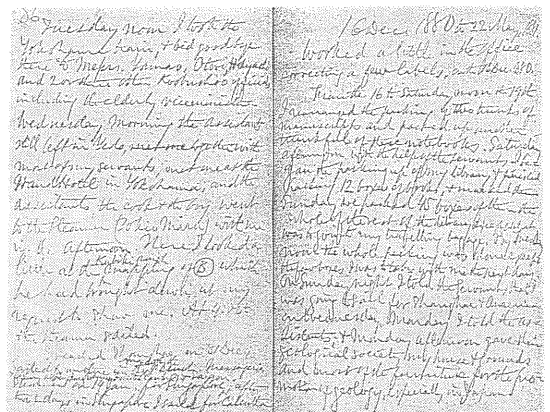
れていたような気がしてならない。

167冊(各冊ダブルページ約100頁)のフィールドブック(field book)をみると、私のようなずぶの素人ですらライマンの仕事への専心に心を打たれる。約120年前に書かれたものと思えず、鉛筆で力強く、極めて詳細に精密に測量調査が記録され、殆ど数字と地図で埋められているノートブックだが、まれにグラント大統領、ウィリアム・クラーク、榎本武揚の名が出てきたり、団子坂の菊人形、川開き等記してあって結構面白い。

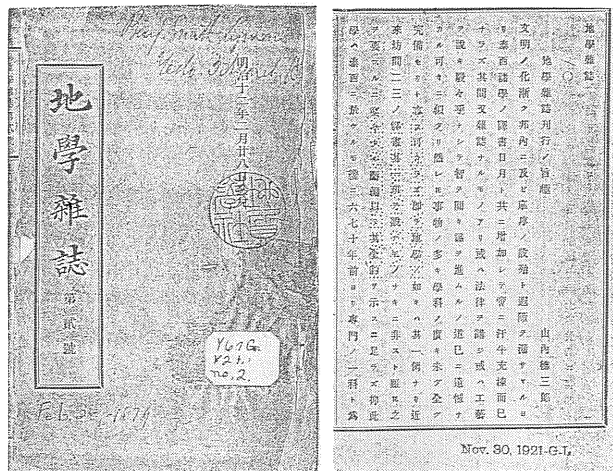
半ば期待しながら、離日の年のL165(1880年(明治13年)11月5日から1881年6月2日まで)のフィールドブックのページを繰っていたら、下記の記録にぶつかった。86頁(第3図)で、右上に1880年12月16日から1881年5月22日と日付がある。

1880年12月16日オフィスにてレベル直しで少し働いた。16日から19日の正午までトランク2個に入れた原稿を詰め直し、又ノートブックをトランクに詰めた。土曜日の午後は使用人の助けをかりて書斎の本12箱荷造りし番号をつけた。日曜日は旅行用荷物に入れる本を除き書斎の残りの本45箱を作った。火曜日の正午までに、翌日私が持つ行く数箱以外は、すべての荷造りを終えた。日曜日の夜、使用人達に水曜日上海へ立ちアメリカに向かうと告げた。月曜日、弟子達に告げ、午後は彼等の地質学会に地質学振興、殊に日本に於いての振興のため、私の家、土地、大部分の家具を与えると知らせた。火曜日午後、横浜行きの汽車に乗り、送りに来た山尾<sup>註3)</sup>、大鳥、林<sup>註4)</sup>及び工部省年輩の少書記官を含む2、3の役人にいとまごいをした。

ここで桑田権平<sup>註5)</sup>「来曼先生小伝」から引用し補足する。



第3図 フィールドブック(12/16/80-5/22/81)より。

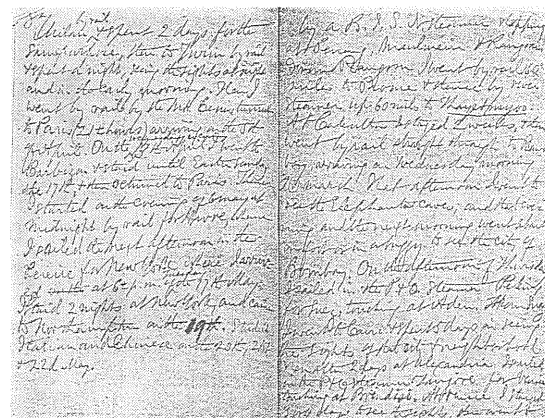


第4図 ライマンと弟子達が刊行した「地学雑誌」

東京市麹町区平河町に於ける先生所有地千有余坪の地積、並に之れに付属する数百坪の住宅長屋土蔵家具に至るまで、一式（時価百万円以上）を我々の創設せる地質学社に寄付し、右雑誌刊行（第4図）の基本財産とすべく我々従弟に恵與せられたるの恩澤を蒙り

ライマン自筆の“Constitution of the Japan Geological Society,”日本地質学会約規約条項が明治8年12月と明治9年1月の書簡の間に綴じられている故、地質学社が出来てきてから、すでに5月の月日が過ぎていたのである。

日本滞在中、最も多く書簡をしたためたのはジェネラル・オートリ、大鳥圭介へであった。時にはマイ・ディア・ジェネラルと親しみをこめた敬辞を用いている。ライマンは大鳥を頼みにし、大鳥はライマンに頼られるだけの器量があったのではなからうか？ 旧幕臣の豊かな教養、新政府の下に仕え逆境に耐える人間性、政治的野



第5図 フィールドブック (12/16/80-5/22/81) より。

心なく誠実に仕事をする態度、その様な大鳥圭介にライマンは好感をもったのではないだろうか？

水曜日（22日）朝 弟子達及び使用人達に横浜のグランドホテルで会い、弟子達とコック従者（ボーイ）は午後私と共に汽船東京丸へ見送りに来た。ここで私はB注⑥)にもってくるように頼んだクビキ（頸城郡）の制作中の地図に一寸目を通した。出港4時。

これ以後、12月31日上海着。広東、サイゴン訪問。シンガポール1月14日到着等々単なる旅行記録に過ぎない（第5図）。カルカタ二週間、カイロへと旅は続き、イタリーを経てフランスへ。思い出の地フランスで一ヶ月程滞在した後、ニューヨークに向かう。ニューヨークで二晩過ごし、ノースハンプトンに5月19日帰宅した。

記録は「19日にノースハンプトンに戻る。20日、21日、22日イタリー語と中国語を勉強した」と結んでいて、正しくベンジャミン・スミス・ライマンは私の想像する克己心の人であった。



写真1 ライマンの江戸麹町の住居と庭。右は女中のおんも、左は召使の浅吉。1879年12月。

<注>

- 1) Geoffery C. Ward “Before the Trumpet: Young Franklin Roosevelt, 1882-1905”. New York, Harper, 1985, p. 78
- 2) 横瀬夜雨編「明治初年の世相」。新潮社, 昭和2年, 178p.からの引用。
- 3) 山尾庸二, 工部省大輔? (明治11年の官員鑑から推定)
- 4) 林政造, 工部省? (同上)
- 5) 桑田権平「来曼先生小伝」。昭和12年, 94p.
- 6) 地図のドラフトから坂市太郎と判断される。

FUKUMI Yasuko (1990): A note on Lyman.

<受付: 1990年3月7日>